

第二期 第二十四号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2018.07.20 定有堂書店 発行

減速する本屋暮らし

魚について

同じ月を見ている

沖縄の問題は日本の問題

今様文房四宝

6月の日記

滝開

ロシアにおける日本年

鳥取あれこれ その二十三

虹を航る転身 ー(上)ー

枝豆

誰も来ない図書館

女六様

スイカ

…… 編集後記

奈良 敏行

坂本 修一

ワクサカソウヘイ

芝野 浩貴

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

五百川 知子

山本千津子

内田 克彦

秦阜 梅林

あきの素生

伊達 文

古賀 啓三

ドラメリア



減速する本屋暮らし

奈良 敏行

(定有堂 店主)

同じ市内だが久しく顔合わせすることのなかった本屋仲間が先日訪ねてきた。隣にコンビニができたこともあり「この機会に廃業する」というあいさつだった。取引先を譲ってあげるといふあたりがたいお申し出もあった。編集長のドラメリアさんに「人は必ず宝を一つ持っていて、いつかそれを誰かにあげるものだよ」と常々語っているのだが、「本当だ」としみじみ思った。人はその宝をもらって明日につなげる。

人と人との付き合いでは、やかましやの女主人が、「人にスピード感を見せてはいけない」とくり返し忠告する。前のめりな人間は人を緊張へと追い込み迷惑をかける、という人生訓のようだ。たぶんこれは貴重な忠告だと、真摯に受け止めている。

近頃は誰もが通販でことをすませます。クルマで10分で行けるショッピングモールがあっても、三日で配達されるネットが便利だ。これは誰も否定できない。手のほどこしようのないときは、抗ってはいけない。花の咲きように心せくことなく、根に滋養を送りつづけることが肝要だ。減速することは停滞することではない。ベクトルの向きが変わるだけだ。

週に一度「減速」する日をつくっている。iPod shuffleで音楽を聴きながら袋川土手を歩く。若桜橋・花見橋・智頭橋・鹿野橋・市場橋・御舟橋・鋳物師橋・有門橋・出合橋・湯所橋とつづく。減速してゆっくり歩くと空気が変わる。身体を中心軸が直立する。急がないので、背骨を安定させた歩行ができる。数日前自分の書棚から久しぶりに『気脈のエコロジー』を取り出した。日本に氣功を紹介した津村喬さんの本だ。減速したところには「気感」が生まれる。「昇・降・開・合」の四つだ。天に近づき地に弾む。自分を放れ自分に戻る。わたしの解釈だがそのように読む。

わたしは未熟で気感を生じることができないので、外界を遮断してイヤホンで結界をつくる。音楽は、ドラマリアさんのフェバリット・コレクションの「アジアン・ミュージック」を中心にしたものだ。帰路にかかる頃には氣感が高まり、川の蛇行と並木のトンネルが外界を占

有する。身の丈が一本の軸のように感じられてくる。自分が希薄になるので、周囲の往来も気にならない。川面をたゆたう木の葉だけを視野にいれながら、ゆっくりゆっくりストレッチをはじめ。そして呼吸をつなぐ氣功体操を十八式行う。心の沈静が染み渡ったら並木の下で套路を通し動画に残す。自分が自分を見つめているという形式を手放したくない習性ゆえだ。人にも見せる。誰も知らない川辺の光景を教えたいからだ。そのとき、自分のことは「岸辺の精霊」と紹介する。大きな声でいうと変に思われることも、小さな声でささやけば、阿吽の呼吸で通じ合う。

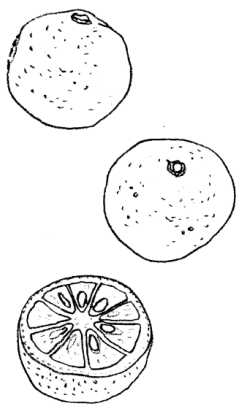
世に捨てられて本の世界は縮小しつづける。世に受け入れられると、本の世界は画一化する。見捨てられたときに、多様な形態を豊かにする。だから本屋はどんなありようでもかまわない。つづけることだ。種は多様な方が残存しやすいと進化論が教える。

岸辺の精霊は冗談っぽいですが、定有堂は岸辺にあることに自覚的だ。「音信不通」は、若桜橋の一夜からはじまった物語だ。減速することで空氣感が変わり、形態変化が生じる。本屋とは〇〇だ、という文脈がおぼろとなり反転する。〇〇も本屋だ、というふうに。減速し縮小する。縮小したところに生じるものは「氣感」だ。この事態を「本のビオトープ」と呼んだ。小冊子「音信不通」の副

題でもある。

「身の丈」という言葉は昔から好きだが、「昇降開合」が感じられるのは小さな世界だからだ。狭く生きる。「ビオトープですからね」、それになんたって音信不通が旗印なんですから…。

2018. 06. 14



Yuzu

猫風閣ギャラリー



魚について

坂本 修一

(猫風閣主人)

妻が蓮を買った。その蓮のため、睡蓮鉢ではなく水甕を買った。水甕の底に伏せて置いた植木鉢の上に、買った蓮ではなく睡蓮を植えた泥の入った植木鉢が置いてある。蓮はもと睡蓮の植わっていた火鉢の中に納まった。なぜ植物が入れ替わったのか、その理由は謎だ。火鉢は従前どおり、フォーカルポイントとして庭の中心部に置かれている。色は独特の青だ。水甕は茶色で、カバードポーチの玄関扉脇に鎮座した。

*

水甕の中でヒメダカが十匹泳いでいる。水位は中の睡蓮の鉢よりも高く、五十センチはある。だから、メダカが泳ぐ部分は、睡蓮の泥のある浅い水域と、その鉢の周縁を越えて沈み込む暗い深淵部とに分けられる。深淵部は鉢の縁に遮られてほとんど見えない。鉢の泥にはオオカナダモの小鉢を沈め、水面にホテイアオイとガラス玉を浮かべた。

*

専用椅子を設けてメダカを観察している。幸い、水甕の位置はガマズミの樹が目隠しになって公道から見えない。よって、変なおじ(い)さん視は免れている。

メダカは決して整列しない。十匹の生存を確認するのは難事業だ。半数近くは見えるところにいるが、あるものは水草に遊び、あるものは深みに隠れている。すぐに数えられるのは六匹か七匹までだ。しばらく見ていてやっと、ふとした拍子に十匹すべてが揃う。その瞬間がうれしくて数えている。人は笑うだろうが、認知症予防に加え、思考のリズムを整える効果がある。というのは適当にひねり出した理屈だ。

*

一匹はガラス玉のそばでじっとしている。体調が悪いように見えても、他の個体が近寄ると追い払っている。一匹は泥の底の突起物を守っている。やはり他の個体を追い払う。やや小さな二、三匹は深潭を回遊しているように、時々浮かんできてはガラス玉メダカや泥底メダカに追われてまた沈む。残りの数匹は水面に落ちてくる小虫を待っていたり、水草をついたりしている。十匹数えられる瞬間は少ない。

*

グッピーも飼ったことがある。値の張る高級な種類で

はない。生態を観察しているだけで夜中になった。卵胎生でよく殖えるが、産卵ケースやウィローモスを使って稚魚の生存率を高めた。外出中に停電し、帰宅してみると球状に集まって水槽の中心部でグッピー団子を作っていたことがある。寒かったのだ。停電が解消してヒーターの電源が入ると、しばらくして団子はほじけた。

県立図書館で『魚病論考』という本を借りたことがある。内容の何を覚えていたわけでもないが、大切に育てていたからだと思う。水槽の掃除屋さんとしてコリドラス・パレアタス、ガラス面にくっつく小さなエイのように見えてかわいいホンコンプレコやボルネオプレコも一緒に飼った。

*

鳥と魚が好きだ。食べる方ではなく、観る方だ。

文一総合出版の『BIRDER』という月刊誌を、一九九一年六月の創刊から二〇〇七年三月まで定期購読した。今も刊行されている鳥の専門誌だ。この雑誌の前身は『日本の生物』といって、こちらも一九八九年一月から終刊まで、不定期に購読した。平凡社の『アニマ』も一九八〇年五月からの不定期購読に始まり、一九八四年一月から一九九三年四月まで定期購読した。それぞれの別冊や増刊号も、その間のものは揃っている。今も机のそばにあり、時々手にする。

鳥も魚も、仕事で忙しくなるにつれて離れざるをえなかった。だから、退職から数年経た今、まずはメダカから復活するのだろうか。

*

魚の群れは英語で school というらしい。ついでに調べると、羊や鳥の群れは flock、狼の群れは pack、ライオンは pride、鯨やアザラシは pod だ。他にも生物の種類により、herd や group、troop など、群れを意味する単語がたくさんある。だから英語は難しい。

メダカの群れを英語でいうと「a school of killifishes」ということになる。「めだかの学校」だ。おもしろい。考えるところなきにしもあらず。

*

メダカの寿命は自然界で一年ほどらしい。飼育下では三、四年だそう。ただし、外飼いではヤゴやタガメ、ミズカマキリなどをはじめ、天敵も多いと聞く。稚魚はボウフラにも食べられると知り、いずくも同じ外の世界の厳しさを感じる。

十四が頑張つて子孫を残し、立派な教育機関として繁栄することを願っている。

(にゃんぷうかく・しゅじん)

同じ月を見ている

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

知人であるところの男性、Aが恋をした。

相手は私もよく知っている女性、B。苛烈な片想いらしく、Aは私に対して、Bのことを考えているだけで飯も喉を通らず、夜毎に嗚咽が止まらず、ありとあらゆることが手に付かない、と漏らしている。恋に落ちて一か月で、わかりやすいくらいにAは痩せこけた。

あー、そうよねー、恋って病氣みたいなものよねー、オレも一〇年前にのちの妻となる人に片想いを寄せた時はそんな感じだったよー、などとAの呻きに対してアバウトな受け応えを返す私であったが、同時に妙な気分を抱いたりもした。Aが語るBは、私の知っているBとは明らかに違う人物なのである。

AはBをとっても魅力的な女性として言葉で再現する。誰にでも優しく、努力家で、賢くて、柔和で、そして可愛くて。私はBとよく一緒に仕事をする仲であり、信

頼も置いている。だから彼女の優しさや賢さに野暮な疑問をはさむ気はない。しかし、Aが表現するほど、Bは極端なプリンセスでないことも知っている。Aによつて「柔和」「努力家」と明言されたBは、まあまあ気が強くてけっこうダラダラするのが好きな人物だと私は捉えている。

結局、幻想なんだよな、と思う。Aが恋しているBも、私が捉えているBも、実はファンタジーなのだ。私たちは他者に対して勝手に幻想を描く。そうしてようやく、他者と関わるができる。

私は葬式に出席することが苦手だ。数年前に親友が亡くなった時でさえ、通夜にも本葬にも参加することができなかった。葬式を前にすると、気が重くなってしまふのである。なぜ私はこんなにも葬式が億劫なのだろう。

葬式とは、端的に「お別れを告げる場所」である。この人の可能性はここで終わったのだ、ということを確認するための場所である。そして私は、好きな人が理不尽に終わることを、簡単には了承できない未練たらしい人間なのである。

他者というのは幻想だ。だから、その幻想が消滅するまで、人は生き続ける。どうも私はそう思っているフシがある。よつて、棺桶に白い顔で眠る友人の顔を見るこ

とはできない。そこにあるリアリティは、幻想を強制終了させるには十分なものだからだ。

件の親友は、まだ私の中で幻想として生き続けている。あの時に会わなかったことで、いまでも会い続けている。

私たちの正体は幻想なのである。そんなことを語っている私自身もまた、誰かにとつての幻想だ。問題は、私に対して幻想を描く人が誰もいなくなった時、私の存在は完全消滅してしまう、という点である。

目下のところ気になるのは、妻が私に対して未だ幻想を抱いてくれているか、ということだ。連れ添って、もう一〇年目。きつと妻は、私が崎陽軒の醬油入れを集めることにこだわったり、レンタルビデオの会員カードで歯ぐきを無意味に刺激したり、「ネプリーグ」などといったどうでもいいテレビ番組を腐った魚のような目でぼんやりと眺めたりする姿などを目撃するたびに、幻想を少しずつ崩していったことだろう。世に言う幻滅ってやつだ。もしかしたら、妻はもう私に幻想を抱いていないかもしれない。さすれば、こうして肉体的生命活動を維持していても、妻にとつて私は死んでいる人と同然ということになる。怖い。

私は、仕事の関係上、月の内半分を家族と離れて暮ら

している。こうした生活を続けていると、「会ってない時間」がいかに重要かをつくづく思い知る。会ってない時間が、相手への幻想を育てる。会ってないから、我々は、また会うことができる。

終電を逃し、しかたなく自宅まで歩いて帰る。すると、空に大きな満月が浮かんでいることに気がつく。

自然と私は「あの人も今頃、同じ月を見ているだろうか」と想像したりする。「あの人」とは、妻だったり、娘だったり、親友だったり、もう亡くなってしまった知人だったりする。月を見て、大切な人の幻想をそこに描く。その時、その人はそこに存在している。だから私は、月が出ている限り、寂しくなることはない。月は幻想を描くためのキャンパスだ。

どうかあの人の今宵の空にも、大きな満月が浮かんでいますように。そう願わずにはいられない。



ヤポネシア ③ 沖縄の問題は日本の問題

芝野 浩貴

(地球探検家)

学生時代に鈍行と徒歩で日本を回ったが、苦学生で新幹線や飛行機など乗れるわけはなく、部活監督時代もワゴンで全国各地を遠征したが、北海道(青函連絡船)・本州・四国(宇高連絡船)・九州にとどまり、唯一沖縄の地を踏むことはなかった。初めて沖縄に行つたのは司書時代の時で、沖縄県立図書館(初代館長は沖縄学の父の伊波普猷・図書館は沖縄の心である)で開催された全国図書館大会(2000年)参加の時だった。島嶼県として、図書館未設置町が多いので県立図書館の担う役割は大きい。ニライカナイの出入り口として波上宮があるから、琉球王国時代は波上宮から首里城を結ぶ線がメイン通りだったと推測するが、沖縄戦後に作られた安里と県庁北口を結ぶ国際通りがどんどん観光客通りとなり、公務で訪れた初回は牧志公設市場を歩いたことしか記憶にない。二回目

は個人旅行として、定番のひめゆりの塔(その頃まだ「ひめゆり」が乙姫と白百合という二校の校誌の合作名とはわかってなかった)、首里城、美ら海水族館など回ったが観光旅行の域を出ていなかった。三回目の訪問はブラジルに行く時の寄港先としてであった。沖縄からブラジルへの移民船「笠戸丸」の軌跡を追う形となった。一九〇〇年前後、被差別部落民として追い出されたり、南米に職を求めて移民した日本人の県別割合で沖縄はかなり高い割合を占める。ましてや戦後は、基地建設で土地を奪われた農民や建設後に失業した土木業者など南米移民は増え続けた。台湾から沖縄に戻ってくる引揚者で人口が増え、住む場所や職を求めて難民が増えた。

もし、マッカーサーの沖縄占領案が却下されれば、沖縄戦でなく台湾戦として台湾が惨事の舞台となり人の流れが変わったかもしれない。「日本人はどこからやって来たのか」の著者で三万年前航海プロジェクト代表の海部陽介氏は二〇一六年与那国島から西表島までの渡航は海流に流されて失敗したが、来年台湾から与那国島への渡航にチャレンジする。北海道から台湾までを一人の人間として擬人化し、日本列島が上半身、沖縄が大腿部、台湾を足先に例える人がいるが、それでいうと海部氏の航海プロジェクトは足のリンパマッサージをする試みとな

る。三万年前に陸だった台湾から琉球列島への海での移動。二万三千年前の世界最古の釣り針は沖縄南城市の洞窟で発見され、先月まで国立科学博物館で展示されていた。日本神話の「海幸彦山幸彦」の中で、嘆く山幸彦に海神へと案内する塩土老翁は潮流の神である。陸の活動から海の活動への史跡として釣り針が見つかったことに日本の浪漫を感じる。久留米を歩いていた時、青木繁の存在を知り、「神話の国」宮崎の青島「鬼の洗濯板」の上で、青木繁の「わだつみのいろの宮」の絵の本物を観たいと思ったが、漱石は「それから」でいち早くその絵に言及していた。

昨冬の台湾から沖縄への移動は黒潮の流れに影響のないLCCでの空路だった。那覇空港発着の飛行機の中からは、低空飛行でダークブルー、エメラルドグリーンの海が鮮明に見え、ウチナーグチに来たことを実感させるが、皮肉にもそれは日本の航空法を超えた米軍機優先の制空権確保のためだった。四回目の沖縄訪問は昨年の夏で二週間滞在。その時の人との縁で冬も数日滞在したが、もはや観光ではない。三回目は読谷村・嘉手納基地、四回目は本島一周し、北谷村・辺野古基地にアクセス。五回目訪問までに、「知ってはいけない」、「日本はなぜ基地と原発をやめられないのか」などの矢部宏治氏の著書中

心に読んだり、三上智恵監督の沖縄三部作(標的の村、戦場ぬしみ、標的の島)を観たりしながら、日米合同委員会や日米地位協定の意味や影響を学習。元々公務員のあり方には懐疑的であったが、無職になり、ますます税金の使い道には敏感になっている。日本が少子化に向かう反面、沖縄は人口が増えているが、大家族はおろか、離婚率も高く核家族さえ崩壊している。私は少子化は問題ではなく、移民問題が日本の問題だと思っている。ドキュメンタリー、ジャーナリズムをどう捉えるか。地球家族のひとつとして探究しているつもりだが、血縁家族でない「家族」を表現した是枝先輩には賛辞を送りたい。(パルムドール賞おめでとうございます)

四回目以降の沖縄訪問では、プロボノを実践する遊歴算家とコラボするため、学校も訪れていた。(プロボノの様子は雑誌「現代数学」の2018年5月号・6月号の数理哲人のコラム参照)

★編集部注…雑誌「現代数学」の執筆者数理哲人さんは、芝野浩貴さんの「遊歴算家」仲間で、芝野さんも同誌「巻頭言」に3カ月置きに連載しています。
(ドラマメリア編集長記)

今様文房四宝

△フカミ ヒロミ

(フライング・ブックマ

ン

学生時代は元より、社会人に成りたての頃は、文書は手書きであつた。流石に、インク壺にペン先を付けながら、という十九世紀ロシアの○等書記官のようなことはなく、万年筆仕様のデスクペンを使っていた。紙の上を滑るペン先の感触と紙に染みこむ黒々としたインクの色合いが、如何にも字を書きました、よくできました、という気にさせてくれた。しかし、広々とした野紙の上に、踊る人形のようにちまちまと並ぶ文字はどうにも拙劣で子供っぽく、居ても立つてもいらなくなつて、徹底的に矯正することになった。

やがて、外圧で用紙がA判に取って代わられたのと同じ頃合いで、筆記具もボールペンが主流となつた。ボールペンは力の加減ができず、何よりもボタ漏れが不快で、暫く使わずにいたが、職場の消耗品から替インクが姿を

消してしまい、それでも自費で購入して抵抗していたが、手書きの機会そのものが急速に減つて行つたため、もうどうでもいいや、とボールペンに切り替えた。(私生活では、今も、手紙や葉書はペン書きである)

古い文書綴などを見ると、薄様紙にカーボン紙を挟んで複写したものや、罫紙に筆書きしたものなどもあつて、なかなか趣深い。古参の職員から、入りたての頃は、毎日こより作りばかりさ、と聞かされたこともあつた。

別の職場に行くと、和文タイプライターがあつた。新旧二タイプがあつて、ニュータイプは学校の授業机に乗るくらいの大ききで電動式。キータッチが軽く、文字盤も表文字(という言い方があるのかどうか)で探しやすい。難点はポインントが小さかつたことくらいである。インクもリボン式で長持ちした。

オールドスタイルは、先ず大ききが半端でなく、事務机二つ分くらいを占め、全てのパーツが金属製で、重量も一トンくらい(は大袈裟だが、しかし人間二〜三人分くらいは優にあつたと思う) あつたのではなからうか。活版印刷で使うような活字が何枚もの文字盤にぎつしり詰まつており、使用頻度によつて位置が遠くなつていく。もちろん全て裏文字で並んでいるので、文選工並みの能力が必要となる。キー操作にもコツが要り、弱すぎると

活字そのものが拾えない。弱いと文字が写らない（カーボン式である）。強いと紙に穴が開く。ガチャツ、ポーン、ガチャツ、ポーン、という音が実にメカメカしいて、文字を紙に「刻印する」実感があつた。

余談だが、活版印刷も、圧力をかけて文字を紙に「刻み付ける」もので、同様の感慨を覚える。紙面を指でなぞると、文字部分が窪んでいるのが分かるだろう。その後主流となった写植やDTPは、文字が紙の上を漂っているような感じがして、ふっと息を吹きかけたら、紙魚や埃と一緒に飛んで行ってしまうような気がする。

ワードプロセッサになるものが職場にお目見えしたのは、昭和も終わりに近くなつてからのことだった。ある日、大きな机と共にディスプレイ（ブラウン管式）やらプリンターやらが設置され、若い連中がワヤワヤと集まつて、触っている。まあ、メカに強い連中が使うんだらうと思つていたが、次の職場で、自分が他人様に教えることになるうとはね。場所を取ることと、まめにバックアップを取らなければならないこと、フロッピーの記憶容量が少ないことなどを含めて、まあ便利なタイプライター（の進化した型）だな、というシロモノだった。

やがて、ラップトップ型が登場し、場所を選ばず使えるようになり、機能が格段に増えたことで、なくてはなら

ないツールとなった。如何せん感熱紙印刷が唯一の難点であつたが、それを補つて余りある使い勝手の良さがあつた。

それ故に、パソコン時代になつてからも、なかなか離れられなかったのだが、ある時、依頼原稿をフロッピー入稿した所、変換できない、という返事が来て、ああ遂にこの日が来たか、と観念したのであつた。ワープロ・パソコン並列時代は、編集部や印刷会社では、ワープロ全機種に対応する変換ソフトを用意していたものだが、とうとう応じきれなくなつたらしい。

ワープロ導入当初は、ワープロ文体論なんぞという議論がかなり真剣になされたが、――確かに、文字変換の際にデフォルトの変換ルールに支配され、違和感を覚えることも少なくなつたが、そして自分の癖を覚えさせるにはいちいち辞書登録が必要で煩わしかったが――しかしそれも、悪貨は良貨を駆逐するの譬えどおり、慣れてしまひ、当たり前になつてしまつた。

今では、余程のことがない限り、辞書を引くことも、武部先生の『漢字の用法』を見ることもない。

かくして人間は機械の奴隷となつていく。

6月の日記

坪井日記 ⑤

齊藤仁昭

(長崎書店)

6月某日

京都でライブ。ネガポジというライブハウスにて。東京でメンバーと合流し車で向かった。6月はライブを4本入れてしまい仕事との都合を合わせるのに難儀した。難儀したのも何も自分が悪いのだがライブを減らしてしまうとタダでさえ乖離した現場感覚がさらに乖離するようで怖くて。怖いってことは自身の演奏に自信がないということなのか？やはり芸術家にはなれない。そもそも現場を意識してたんだお前、って感じ。もうしません。

間もなく40歳になる。体力の衰えを感じる。体を作り直したいので何か始めたいのだが何がいいのだろう。走るべきだろうか。太極拳にとっても興味があるのだけれど身近な教室が見つからない。体力もないし、来月には子どもが生まれるし、段々バンドとかやつてる場合じゃないよねと考えるようになると思っていたのだがそういう気配もないのでやはり体力をつけるべきだろう。

6月末のライブは東京吉祥寺にて、すばらしか、という名前の若いバンドに呼んでいただいた。若者に声を掛けてもらうのはうれしい。若者じゃなくてもうれしい。もう一組の出演者は山本精一さん。とても楽しみ。7月は妻の出産なのでライブはお休みするが、8月は岡山と神戸。9月は熊本と名古屋。神戸の男性客の怒号がたまらなく好きだ。名古屋ではくさ正文館に寄れるといいな。

6月某日

ジニー・ハモンドの『Wild Horses Rock Steady』というアルバムを買って聴いていた5曲目「It's Impossible」が TOKYO NO.1 SOUL SET の『L』収録の4曲目「否応なしに」の元ネタじゃないかと気が付いて、『L』を久しぶりに聴いてみた。素晴らしかった。大学1年とか2年生のときはほとんど毎日聴いていたと思う。川辺ヒロシのトラックは今も新鮮に楽しめるし、トラックだけでも十分聴ける。BKKED の歌詞はまったく文脈が連ならないもののストーリーもないのに、イメージの断片が積み重なり続けることで映画のように響く。天才。BKKED の詩集、再発しないかな。パルコ出版だったかな。渡辺俊美のメロディーはブルーハーツくらい明確でキャッチーで太い。裏声を多用するのは何に影響を受けているのか。こちらでも天才なので影響とかないのかもしれない。それとも出来上がったトラックに合わせるための苦肉の策だったのか。まったくフォロワーが居ないのはオリジナリティーの所以。

ミュージックビデオも観たくなつてしまふ「Sunday」を youtube で検索。ウイニングイレブン(コナミのサッカーゲーム)のプレイ画面と、メンバーやスチャダラパーはじめ「B2」の面々がベンチで一喜一憂する姿を交互に写し、ブラジル代表とイングランド代表の試合に見立てたタケイグッドマンの素晴らしい仕事。80年代の東京で遊んでいたであろう若者たちの姿が記録されており眩しい。ついでに「夜明け前」のビデオも観たら、ストーンローゼズの「fools gold」のビデオに似ている気がする。全然関係ないのかな。「ヤード」のビデオも最高です。

6月某日

大牟田市のタラムブックス&カフェにお邪魔。とてもいいお店だった。喫茶スペースに置いてあったスタジオボイスの2916年11月号が本の特集だったので何気なく読んでいたが、内容がとても真面目に感じて驚いた(もちろん真面目に作られているのだが)。やはりこの10年ばかり世の中が不真面目になってきているのは間違いない。

*

向かつて右は太陽系
軽やかに行くうぜ
思ひ出すねあの辺で
君に近づいて

僕ら宇宙幽霊
つらくもないよ

フラリ浮かぶ二人綿毛のよう
戻る場所もないし
寄り添つて 飛び散つて
踊り出すがいいさ

僕ら宇宙幽霊
つらくもないよ

回り出す僕のかけらを拾い集め
君は時計の中でひとり歌う

私は待つわ

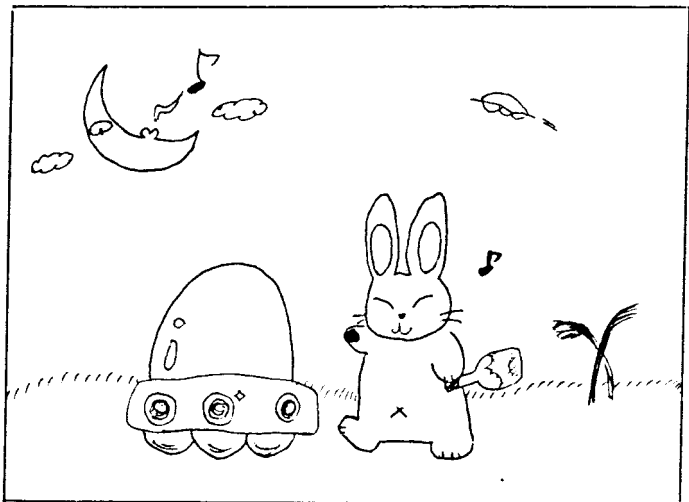
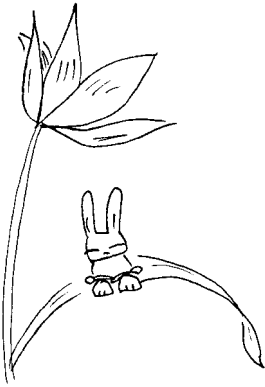
片眼のバスが

ループを過ぎて迎えに来るわ

光が射せばさよならかしら

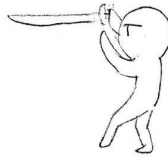
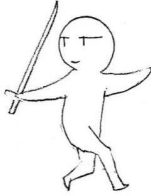
降り立つ誰かの声が聞こえるかしら

(ケバブジョンソン「宇宙幽霊」、作詞：杉浦真寛)



一緒に太極拳、やりませんか。

定有堂2階



滝開

五百川 知子

アシル



五月雨るる石灯籠の古りしまま

惑星の水を含みて額の花

村人の太鼓轟く滝開

星の無き闇に蛍の流れをり

とこなつの花のくれなゐいとほしみ

ロシアにおける日本年



山本 千津子

(ROSKA コーシカ)

前号で戸泉米子著『リラの花と戦争』のロシア語全訳版ができたことを書いた。六月四日にウラジオストクでその本のプレゼンテーションが行われた。三章からなる五〇〇ページの本が翻訳され、著者の青春時代から晩年までの写真も入って、私の手元に届いた。桜の花のデザインの中に書かれた数字は、510まで。日本語版とほぼ同じページ数になっている。

させていたきたい。

ウラジオストクでは、このまちに縁のある人たちから日本語とロシア語による自由作文を集めよう、という企画が持ち上がり、私にまでお声がかかってきた。というのも、完訳版が出版されたことよって、十七年前に第一章の翻訳に関わった私のことが思い出されてしまったのだ。ロシア語から遠ざかっている今、能力的にも時間的にも無理だと思ったが、ロシア人の熱意に負けて書くことにした。期限も大幅に遅らせてもらって。

実際、書こうという気持ちになったのは、先方がいろいろな質問を投げかけてくれたからだ。どうしてロシア語を学ぼうと思ったの？どのように翻訳に取り組んだの？ウラジオストクやロシア人についての第一印象は？ロシア人とどんな出会いがあつて、どんな物語が生まれたの？そう、全く同じだ。「音信不通」に何をどう書いていいのかわからない私に、奈良先生がメモ書きとして、具体的に質問を与えて下さったのと。この最初のメモが助けになり、いつも手元にあるおかげで何とかここまで続いている。

この喜ばしい出来事に続いて、ロシアではサッカーワールドカップが開幕し、初戦でロシアが勝利した。そして、今年「ロシアにおける日本年」と称してロシア国内では、一年を通して日本の芸術・文化などが紹介される。私の周りの小さな出来事として、一つ、ある企画を紹介し

まずは、日本語で書いた。それからロシア語に訳して

いく作業をした。ロシア語で書き始めると、いつの間にか日本語とは違う方向へ論理が進んでいき、結局、日本語文を書き直すことになってしまった。もし、日本語の原稿を渡してロシア人が訳してくれたとしたら、ロシア人が読む上で何ら違和感のない正しいロシア語の文章になっただろう。でも、私が言いたかったことからは何となくはずれてしまうのではないか、と思った。

また、私の書いたロシア語の文章を読んで、日本語訳がどうしてこうなるのか、と疑問に思うロシア人の日本語学習者もいるだろう。ロシア語では、この形容詞をここに入りたい、この言葉一つで感情を込めることができる、と思っても、日本語ではその言葉は必要がなかったりする。ロシア人はこんな風には書かない、ロシア語らしくない変な文章だ、と感覚ではわかっていても、ではどうすればよいのかというと、何もできない。仕方がないので、今の私が使える単語をつなげていくだけだ。和露辞典に助けられながら。

同じ内容を二つの言語で書くという初めての経験だった。単なる和訳、露訳では収まらない何かがあった。そして、十七年前に戸泉さんが、私たちの訳したものを読まれて、「ありがとう」以外に何もおっしゃらなかった

ことを思い出した。二か国語を同じように話される人の書かれたものを訳すなんて、何と恐ろしいことをやってしまったのだ、と今になって恥ずかしくなった。なぜ、訳し終えた時点で、ご本人に読んでもらおうとしなかったのか。どうして、翻訳中也確認を取らずに、自分勝手な解釈で満足していたのか。思いがけない後悔と反省に悩むことになった。

もう一度、届いたばかりの本を手を取ってみる。やはり、この湿ったような柔らかいと言えやわらかいが、手にまとわりつくような感じが嫌なので、書店でもらう紙のカバーをつけた。ロシアでは本を手にしたときの手触り感、ページのめくりやすさ、特に絵本では紙の質にこだわるようだ。日本でもそうなのかもしれないが、文字がそこにあればいい、という程度にしか本を見ていなかった私には驚きだ。視覚に訴えることと同じほどに、ページをめくる指先にも配慮して本は作られているのか……

改めてじっくり眺めてみようと思ったところ、本はすでにロシア人の友人のところへ行ってしまった。帰ってきたら定有堂書店へ連れて行って、触れていただこう。

鳥取あれこれ

その二十三

内田克彦

(地域研究家)

夫君は酒によって仕事の繁忙をまぎらかすという人だったので、碧川姉は大いに悩み、これは学生時代から禁酒の習慣をつけなければ救えないと感じて、当時小石川区（今の文京区）の竹早町に住んでいましたので、キリシタン坂を通じて拓植「ママ」大学の寄宿舎に行く学生達に禁酒を宣伝することを思い立ちました。

(承前)

かたはいつから禁酒運動に携わっていたのだろうか。安部宙之介著『露風の「赤とんぼ」の母』が引用する雑誌『火の柱』昭和二三年四月五日号に、賀川豊彦の弟子である牧野仲造による、次の記述がある。

大正七年のころ、竹早町教会の婦人会幹事をつとめてゐた碧川かた女史は、拓植「ママ」大学寄宿舎で行ふ禁酒のすゝめのため、度々この坂を通らなければならなかった。

また、牧野は、同様の記事を、肩書を「朝日新聞社東京本社資材部松沢教会員」と記して、昭和31年12月8日付の『キリスト新聞』に載せていた。

当時かたの住まいは、竹早町の隣の久堅町であり、また、未見の資料が発掘できるかもと期待して「竹早町教会」を調べてみるが、存在自体が確かめられない。かたは、この時点では個人的な思いで動いていたのであり、組織的な禁酒運動をしていたわけではないのではないか。

ここで、我が国の禁酒運動の歴史を振り返る。まず、一八七五年「横浜禁酒会」発足、一八八六年組織化される。一方、一八九一年、前ハワイ領事安藤太郎が、アメリカ留学から帰国したクリスチャンの根本正と「東京禁酒会」設立。他方、一八八六年、矢島楯子（かじこ）を会長とする「東京婦人矯風会」設立、一八九三年全国的組織の「日本基督教婦人矯風会」結成。「横浜禁酒会」は一八九一年「日本禁酒会」と改称したが、一八九八年、東京禁酒会や各地の禁酒団体を一堂に「日本禁酒同盟」設立。根本は、一八九六年衆議員議員となり、一九〇〇

年、未成年者喫煙禁止法を通してから、今度は、毎年未成年者飲酒禁止法を帝国議會に計一八回提出したが、なかなか可決されなかった。

前回紹介した、一九二〇（大正九）年一月一日、明治神宮の鎮座祭での、「婦人社会問題研究会禁酒部幹事」のかたらによるビラ配りに加えて、二二（大正一〇）年四月号の『新眞婦人』のコラムに「禁酒デー」と題して、次の記事がある。

三月十三日の日曜日に、大日本国民禁酒会で全国禁酒会連合の大禁酒宣伝をしました。婦人社会問題研究会でも、二月十一日の紀元節の宣伝が雨の為に出来なかつたので、御手伝をして上野公園を受持つて、五万の宣伝紙を配布しました。当日、碧川かた子（略）と禁酒会本部の（略）氏と、女医会の（略）女史の応援とで大変に成功しました。

最終的には、これらの運動が奏功して、一九二二（大正一一）年、第四五回帝国議會最終日の三月二五日、根本正議員提出の未成年者飲酒禁止法が成立するのである。

ところで、一九二三（大正一二）年一月廿八日発行の『婦女新聞』には、次の記事が載っている。

婦人禁酒会の運動

伊東哲子、高橋千代子、川島とゑ子、碧川たか子、四婦人の発起で婦人禁酒会といふのが組織され今期議會に左の七項の建議案を提出すべく運動を開始したさうな。

一、婦人の禁酒。二、学生の禁酒。三、議院内の禁酒。四、酒場、料理屋并に飲食店等に於ける酒類の取扱時間を午後四時より同十時までとする事。五、焼酎、ブランデー、ウキスキー等の火酒類に一層重税を課する事。六、警察官の禁酒。七、交通機関に従事する人の禁酒。

第四六回帝国議會に建議案が提出された形跡はないが、前年に成立された、未成年者飲酒禁止法に上乘せして、それ以上のものを求めていくということなのだろうか。因みに、一九二六（大正一五）年には、「未成年者」を「二十五歳未満の者」に改める法改正案が提出されている。

（以下、続く）

二〇一八 六、二八

虹を航る転身 — (上)

秦阜梅林 (やすおかばいりん)

(楽人)

序

「アイーダ」の初演。カイロの新劇場で幕を開けた唯一のグランドオペラで凱旋して後、ヴェルディは隠遁…文字通り晴耕雨読の田舎暮らしだ。関係者とは誰とも逢はず、四重奏を書いたり自らの祈りの樂を捧げても舞台の為にペンを執る事は無く伊歌劇の革新もはや此処迄? 誰もがさう思つてゐた、そこへバイロイト留学から還つた青年ひとり。

名をアリーゴ・ボイトー、「メフィストフェレス」でファウストの舞台をアルプスの南に運び、この一作はレパルトワールとして生き残つた。なのに「自分の樂力に限界」を感じたのか? あつさりと作曲の筆を折つた。翁は若者を歓待、あらう事か終生最大のライヴアル、ヴァグナー樂劇の情報を蒐め其の理論、システムをせつせと学び始める…歟を揮い耕地を踏み乍ら…やがて若者が問

ふ「マエストロそろそろ新しひ伊オペラやつてみませんか?」翁応へて曰く「ほんが無けりや…」若者「シェイクスピアぢや、ご不満?」翁「なら書く! さう云いたひところじやが生憎君も知つての通り私あ英語が駄目だね…心の壁まで描くには」若者「だったら僕がいつちよ工夫してみませう!」台本作家ボイトーの誕生である。語学に長けた彼の訳に依り伊語で生き生きと踊るシェイクスピアの詩句。まんまと老獪な大家を焚き付けヴァグナーに挑戦させる事に。

I

「もし伊オペラを長生きさせたひなら? ハーモニイの可能性を本質的に拡大しオーケストレーションを充實させなければ!」若者の主張。いつ迄もズンチャカチャツチャ、美しい旋律にありきたりな機能と声のそれでは! 翁も出版者リコルディを諫め書いてゐる「北方から流れて來た雲の事で文句を云つて居る、君は間違つています。私は素晴らしいものだと思つています。光と太陽を齎してくれるなら北方万歳!」と。ヴァグナーが自分の思想を普及させる為に記した独断論やプロパガンダを滑稽且つ陳腐なものと看破しつつ、作品の創造性を賞賛。美学的学説や芸術に於る抽象概念、世界観等では無く手仕事・イン

スピレーション・作家の歴史的教養のみを彼は信じたのだ。

II

慎ましく頭を垂れヴァグナーに學んだ老翁は然し、樂劇の實際やらヴァグナーの体臭迄模倣する事無く、その本質を往く水の自然な流れをそつと汲み、樂の養分とし乍ら…専ら自らの声で語り伊流を喪ふ事無く歌った。

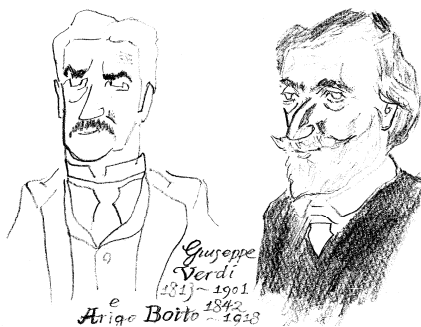
若者は唯「シェイクスピアとヴェルディを接ぎ木する事」にのみ全身全霊を傾け、漸く完成させた台本に初めて目を通し再び翁曰く「迫力に満ちた場面と詩句だ」と。若者は続けて云った「人は自らの運命から逃れられませんが知的親和力が働くと云ふ法則に従へば此のシェイクスピアの悲劇は、既に貴方に定められたものなのです…」と。

：

… 以下次号

「今月の二枚」 ① G. ヴェルディ、弦樂四重奏曲ホ短調 (1873) アマデウス四重奏団 (独グラモフォン®1980)
② 同 4つの宗教的作品 (1889~1897) RIAS (ズルリ
ン放送) 室内合唱団及び交響樂團 指揮 F. フリッツチャ
イ (独グラモフォン®1978)
「今月の一冊」 「大作曲家ヴェルディ」 H. キューナー
著 岩下久美子訳 音楽之友社刊 1994

画. A. T



枝豆

あきの素生

(くうねるめがね)



とうもろこしの一番おいしい食べ方、というのを教わったことがある。

鍋に湯を沸かしたまま、畑に行つてとうもろこしをもぎ、すぐに茹でる。もぎたてを茹でるのがポイントなのだそう。とても甘いとうもろこしになるよ、と聞いて、ぜひ食べてみたかったが、残念ながら、我が家にはとうもろこし畑がなかった。

アスパラも、この方法で、ぐんとおいしくなるらしい。すべての野菜がそうなのか、野菜に限った話なのかはわからないが、とにかく野菜というものは、収穫してから時間が経つにつれて、糖度が落ちていくものなのだと私の中にインプットされた。

同じ頃、たくさんできるから困っちゃって、と、枝豆を大量にいただくという幸運に見舞われた。根っこから

引き抜いた枝付きのものを何本も。塩茹でという、あのオーソドックスな食べ方では間に合わないし、飽きてしまうから、ポタージュスープにしたりしていると聞いて、困ったり、飽きたりするほど枝豆（しかも冷凍じゃないもの！）を食べられる生活に心から憧れた。つまり、枝豆が大好きなのである。もちろん、機を逃さず、ポタージュスープを作つて食べた。

そして、得たばかりの知識、「野菜は取れたてを茹でると旨い」を、枝豆でも試してみたくなった。こうなると、だんだんそのことばかり考えるようになってしまう。元々、きょうだいや、いとこたちに比べて食が細い方で、どうしてこんなに食べることに執着するようになってしまったのかと自分でも不思議だし、この情熱をもつとほかのことにと思わなくもないのだが、まあ、こういうふうになってしまったのだなあと、しみじみ天井を見上げることにくらいしかできないものである。

それはさておき、枝豆については、望みを叶えるために、家で栽培することに決めた。先ほど、とうもろこし畑はないと書いた。水田もキャベツ畑もすいか畑もないのだが、小さな庭に、葱やミニトマトを少しだけ植えられるような、家庭菜園できるスペースはある。「昔は田んぼの畔に大豆を植えていた」と聞いたし、それほど肥

沃な土地でなくても栽培できるのではないか、と思い、次の年に実行に移した。

少し前に油粕を混ぜ込んでおいた土に、しっかり水を含ませ、買ってきた種（豆）を植えて、芽が出るのを楽しみに待った。

芽が出てきたときはうれしかった。豆が双葉になるのか、ころんとしてかわいらしい芽だった。

だが次の日、様子を見に行くと、芽（双葉）がなくなっていた。事態が呑み込めず、待ち焦がれすぎて夢でも見たのかと思ったが、他の芽が出かけていたので、深く追及することなく水を遣った。

しかし、またその次の日、芽がすべてなくなっていた。これは何かが起こっている、遅まきながら危機感を持ち、よくよく見てみると、いくつもの芽の根元に、だんごむしが丸まっているではないか。さらに、なめくじが通ったあとにできる、きらきらした痕跡が残っている。あのかわいい双葉は食べられたのだ。

新しい種を蒔き、また芽が出た。なぜか家にあつた、頭に着けるタイプのライトを装着して、夜な夜な枝豆の様子を見に行き、近くに彼らの姿があれば取り除いた。

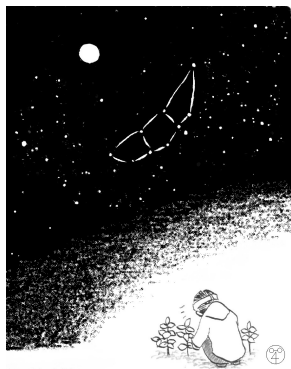
しかし、ひと晩中見張っているわけにもいかないし、取り除くにも限度がある。そこで、なめくじには、天然由来成分の忌避剤で、だんごむしには、紙コップで対応

した。紙コップを輪切りにし、コップの縁の側を上にして芽を囲むように差し込むと、「忍者返し」ならぬ「だんごむし返し」になるという寸法だ。

作戦は功を奏し、枝豆はすくすくと育った。育ったのだが、やはり栄養不足は否めず、以前いただいたものと比べると、枝はひよろひよろ、豆は平たく、取れたてを茹でても、味の違いがわからなかった。

冬の間に肥料を遣り、再度挑戦したが、結果は振るわず。枝豆栽培は2年で止めた。

今、庭では、くちなしの木がかつてないほど元気だ。枝豆が残してくれた、少しだけ肥えた我が家の土である。



（イラスト・あきの素生）

誰も来ない図書室

伊達文

(人生休憩中／ノージャンルイベント)

誰も来ない図書室を作っている。

いや、そもそもは、本が少しあるので図書室だが、別に本を読まなくていいし、かといって交流もしなくていい、会員制の図書室みたいなものを作ろうと思っていたのだ。今は人を呼べる精神状態ではないので、結果的に誰も来ない図書室になっている。定義が破綻している感じで、こういうのもいいなと思うし、人が来るようになってもいい名前で作るのもいいかもしれない。

こういうのを作りたいと思って始めるんだけど、作りはじめるといういろいろやれないことがあって、やれないことをやるように頑張るのではなく、そのときの自分がやれるようにやっている、変なものができる。

本がメインではなく交流が目的でもない図書室らしきものを作ろうと思ったのは、曖昧な居場所を作りたいから。昨今本の場合は交流したい人の熱で動いているように見えるけれど、私は、交流するのは気が疲れること

も多いし、上手くない相手もいるので長期的にはやれないなと思っていた。

本にかぎらず、場を作ることは人と人のつながりを目的にしがちである。でも私は、今が極端であるにせよ、もうあまり広範には人と関わりたくない。でも場は作りたい。やっぱり向いてないのかな。

そんなことを考えていたとき、二つの場所に出会った。どちらもカフェで、一つは、蔵前にある蕪木。二つ目は、久我山の喫茶杖。どちらも非常に静かな空間で、喫茶杖にいたっては、入り口を入ってすぐのところに、おしゃべり禁止という看板がある。お店の造り自体も、1階が調理と会計、2階がお客様のスペースなので、注文と会計以外、本当に会話しないでいられる。

蕪木の静謐な空間の中で、私の思考が、適切な脳内の引き出しに入っていく。喫茶杖の暗くそして自分の家ではない場所は、思考をいつもと違った位置や広さや深さに連れていってくれた。

個人でカフェをする人やカフェという場は、お客としゃべれるほうがよいとなんとなく思っていた。でも、したくないこと、やらないことは、それがその物事の根幹的なこと思えたとしても、やらないと宣言してしまえばいい、やらないでいられるのだと思った。それがいいと思っただけ来る客もいる。

誰も来ない図書室をひっそり作るのは楽しい。木箱に数冊の本を置いただけ。でも私にとっては図書室である。自分の他の蔵書とは別に、テーマを決めて1冊ずつ増やしていこうと思っている。

自宅ではない場所。誰かに会うかもしれないが、必ずしも交流しなくていい場所。でも他人の存在がうつすら感じられる場所。目的が決まっていな場所。役に立つ、お金になるといった「意味」で埋まりがちなこの世界に、そうではない場所をつくること。

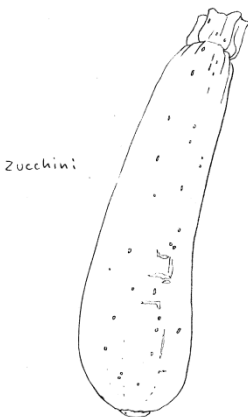
もう一つ、交流しない図書室の対として、閉じた場で話をする小さなお茶会も考えている。信頼できる小さな範囲で交流する、時間と場所。わっと集まって短時間で課題を解決するのとは対極の、ただ深く話し込む場。

イベントや自宅でのご飯会お茶会をしてきて、人と人が深く話しこめるのは、3、4人が限度だと思った。これぐらいなら、相手のことを聞くこととテーマについて話すことの両方ができる。なので、お茶会は、私を入れて3人、つまり呼ぶのは友人2人までという、極小サイズでやろうと思っている。

もちろんこれも、今ほぼ人に会えない以上できないのだけれど。今できなくても、考えたり、やれることをやっていいから。

仕事で近くに来た音楽家の友人が、持ち帰るのに荷物になるから預かって、ついでに売ってよと、自分たちのCDを置いていったので、誰も来ない図書室に置くことにした。こうしてわが家はにわか委託販売所になった。誰も来ないから、売らない委託販売。こういうなりゆきは好きだ。

これからも、場は私の思惑と私の予期しないものとで変貌していくだろう。交流しない居場所と、閉じた交流の磁場。小さな場所を、小さなペースで、作り作られていく。



画集「Vegetables and fruits A to Z」から 画 f.n

女六様

土質 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

六人の女と「私」との間に起こる事柄を小説にしつつあり、うち三人は「私」の娘たちなので、参考にといい、あちらは四人姉妹だが、大谷崎の「細雪」を読んでみた。読後、なんか同じように感じたことがあるな、と記憶を辿ってみると「アンナ・カレーニナ」。

古典だと思い、正座して読んだらなにこれ大衆小説じゃん、という脱臼感。

しかし、貶してはおらず、大変面白く、いわゆる Page tuner という奴で、こんなに面白くてすらすら読めるものが古典のわけがない、というのは「演繹」でしょうか。

「カラマーゾフの兄弟」の「大審問官」を読んだ際の苦痛。アレを以ってして初めて古典を古典たらしめる証だとひとは考えがちなのである。

ロシア文学を連想したのは、退嬰的な大家族の日常の散文的列記のせいもあるのかもしれないが、加えてロシアから亡命してきた家族などというものも登場するし、

そのうちのひとりとはわざわざオブロンスキーと、アンナ・カレーニナの夫と同名、且つ政治論争好きであったり、姉妹全員が招待された夕食の暴飲暴食の様子も、オブロンスキーとレーウインの生牡蠣三十個、野菜スープ、平目のムニエル、ローストビーフ、といった小説冒頭でのホテルでの会食を想わせる。

こんなの書いてみたい、と思って書き始めたら、ロシア人が出てきちゃったのだろうか。

天変地異がロシア文学に於いて特徴的な役割を担うものなのか、明るくないが、神戸での大水害や、次女が三女を伴い、東京の本家訪問中の台風の描写、特に前者はストーリー・ラインに対して、かなり重要な意味を持つ。「偶然もの」を小説で扱うのは難しいと思う。それはねえだろ、になりがちだし。

これは小説の長さに左右されるのかな、とか思った。時折ここに掲載させて載いている、四、五枚の掌編の場合、例えばだけど、苛烈な、悪意に満ちた苛めそのものと、対象、及び加害者につき累々と四枚(四枚を「累々と」とは云わないか…)書き進めたとする。そして、五枚目で、悪童健太は日々の習慣で、授業開始前の校庭の砂場のブランコで、本日の昭男に対する苛めプランを策定するのを常としていたが、閃きかと思つた閃光は落雷でありました、と悪童健太を Kill off (ドラマや小説で登場人物を死によって削除することをキル・オフ、という)したら怒りますよね。ませんか？

ところが、これが長大なテキストであった場合、作爲性がキャンセルされるように思われる。パール・バックの「大地」でいきなり蝗の大群が飛来し、丹精した作物を食い散らしても、ふんふん、そんなものかなと思う。

実人生を模倣するほどテキストが冗長になると、「偶然もの」が蓋然性を帯びてくる。のでしょうか？

で、あれだ、結局「細雪」はおまえが書いている小説みたようなものの参考になったのか、と問われると、なりませんでした、でしょうね。にも関わらず、今考えている、「女六様」なんていう題は影響を受けてるっぽいですね。変えようかな。この作品には日本人も日系アメリカ人も登場しないのに、やや和風過ぎ？

視点が違い過ぎる。

僕は「私」の実際の娘達につき書こうとしている。

「細雪」は雅やかな日本語で記された準古典のような評価を受けているようだが、女好きで、特に上方の女が好きで（それが嵩じて東京から大阪に移住した作家が）、特にこのような階級に属する上方の女が堪らん、と、そういう女達の生態を書きたくて書きたくて、書いた生臭いもののように思われる。兎に角、作者が変態的に魅かれるのであろう、女の愚鈍さや、体の不具合の様子が盛り沢山。

例えば、繰り返し言及される三女雪子の目の淵の痣につき、医師は結婚生活が始まれば恐らく解消するであろ

う、と、性交によるホルモン・バランスによる改善を暗示する。

行かず後家に成りかけの三十五にしてやつと嫁入り先を見つけた雪子が、婚礼が行われる東京に向かう際の、つていうか、以下がこの長編のラスト・センチンスだ。あの意味ラディカル、つていうか、どこが「雅やか」やねん…

『（昔、次女の姉が嫁ぐ際）けふもまた衣えらびに日は暮れぬ嫁ぎゆく身のそぞろ悲しき、と云う歌を書いて示したことがあったのを、図らずも思い浮かべていたが、下痢はどうとうその日も止まらず、汽車に乗ってからもまだ続いていた。』



siso

スイカ

ドラメリア

(座敷わらし)



限らず、名刺交換の方法や子ども向けの手遊びうたなど、ちよつとしたことのやり方を知りたいときに、同じように動画を探した経験がある。「すこしのことにも、先達はあらまほしき事なり」と昔から言うが、本当に少しのことなら、今は誰かに直接教わらなくても動画で教えてもらえるのだ。インターネット万歳。実にありがたい。話は変わるが、先日「がぶりこ」という大栄町特産の黒皮スイカを食べた。甘くて種が少なく、外箱もちよつとお洒落でかわいらしかった。お察しのとおり「すいか」という音以外に何のつながりもない。



・編集後記・

一週間ほど東京に行ってきました。ICカードを購入し、コインランドリーも使い、もんじゃ焼きも食べ……と初めて尽くしの滞在になりました。

ドラメリア (編集長)

先日米子から来た書店関係の人たちに「定有堂を底支えする力って何？」と聞かれ、レジリエンスとブリコラージュ、と答えた。やり直す力、自前でやりとげる力……かな。

奈良敏行 (発行人)

先日上京した際、スイカを初めて買った。果物（いや野菜か）ではなく、ICカード乗車券の方だ。もともと便利な道具や先端技術に疎い方で、カード一枚で用件が済んでしまうのがどうにも胡散臭くて信じられない。それで何度か都会に行った際も手を出さないでいたのだが、いざ使ってみると実に快適だった。いちいち路線図と睨めっこして小銭をじやらじやら出し入れしなくてよいし、乗り換えもスムーズ。コインロッカーもこれをかざすだけで利用できる。「余ってしまったら、自動改札がない鳥取では使うアテがないじゃないか」と思っていたが、コンビニなどの買い物にも使えるそうだ。

それにしても、便利な世の中になったものだなあとつくづく思う。購入方法や使用方法があやふやだったので、某有名動画サイトでやり方を探してみたのだが、ちゃんと動画を作ってアップしている親切な人がいた。これに